

それでは「無意味」のそれか――

僕は魅力あるこの言葉を考へてみようと思つた。その言葉を自分のものとして味わつてみようと思つた。

まあなく、僕は友人のK君から権名麟三という小説家を聞いた。そしてその人が思想的に読む価値ある人だということも聞いた。今からはまさに読んでみた。魅力ある言葉に惹かんと多くてくわしたところか。しかし、自分のモノとなつてくれたものはなんだろう。曖昧な言葉だ
けである。自分は何故そのような結果になつたのかを定めることを断つた。そこで丁君、君はこの曖昧さを明確にしてくれ。

引用した文章は権名麟三の「その日まで」の一節である。丁君、君はこれを読んで何を感ずるであろうか。『曖昧に生き曖昧に死ぬのが俺達の運命だろう』で止まるのだろうか。

そうではないだろう。きっと丁君、君も「そのような運命に反抗せずにはいられない」であろう。だからその一片の紙きれに墨かざるを得なかつたであろう。しかしあのままで終つてはいけぬ。あたり前と思われぬあの言葉をきくと深めてくれ。

「何だうすればよいかつて」「否どこか君はこの世の中の無意味を吐露して来た。しかし君は無意味にかかわらず生きて居る。昨日も学校へ来るであろう。『この無意味にかかわらず自分は生きて居る。この事実が自分にどうして至上のものではないか』と考へて居るのである。つまり無意味だということと生かして生きていることへ自分を知りたてて居るのではないか』と考へて居るのである。同じ著者に「永遠なる序章」という本の中で主人公の甲太という人間が後三ヶ月より生きていることができないといふことを設定としてその思想の追求がなされている。人間にどうして死、これは絶対不可避のさせられないものである。君だつたらこれにどう対決するだろう。『あたりまえ死なねば死ぬ』などと言われないだろう。死なねばならぬ。では一体我々は何人のために生きて居るのか。ここで君は我々の存在の意味を考へねばならぬであろう。このことも君が書きおいた言葉を解決をあたえてくれるものと思つた。

丁君、君の言葉は僕への反省である。僕も君の言葉から出なすだ。

我々の日常の生活は魅力ある言葉を生かすには余りに大きな抵抗である。だからといってその言葉を言葉だけにしてしまつたのはズルすぎる。抵抗が大きければ大きいほど、言葉の内容が眞実の内容が生きて来るに違いない。

我々日本人は思想上の貧弱さが無いと言われている。それこそ純粋な言葉の内容がともなわぬ言葉の思想だからに違いない。どこかく丁君、お互いにどまかしのないように入道してこつた。